

## 『懷風藻』序文と長屋王詩宴にみる対外意識

月野文子

### 一、はじめに

『懷風藻』所載の漢詩が詠作された時代（七世紀後半〜八世紀前半）は、海外情勢を意識し、外交に心を砕いた時代でもあった。そのことを『懷風藻』序文および収載作品から見て取りたい。序文を突破口とするものの、『懷風藻』編纂者（序文の筆者）が誰であるかという点より、彼が文学活動の意義をどのように捉えていたかを確認していく。稿者自身は当時の漢詩制作を〈対外意識を根底に据えた文学活動〉として捉えている。この点に留意して序文および収載詩を見渡していくため、従来とは別の視点で懷風藻編纂の意図を導き出すことになる。

従来の研究では『懷風藻』序文そのものが問題とされることは殆どなかったといつてよい。稀に問題とされることがあるとすれば、『懷風藻』編纂者が誰かということに関してであって、それは序文の内容から編纂者を探ろうとする方向であった。そこで導き出されたのは、序文が近江朝に同情的であることから、編纂者は天智天皇ゆかりの人物ということであった。序文は、文学活動が盛んになった天智朝について、全体の三分の一をその記述に充てて

賞賛している。序文が天智朝に（理想の治世）を見出ししていることは確かである。しかし、注目すべきは我国の文学活動が成立するまでの展開を、朝鮮半島との交流を絡めて説いている点である。

序文は、天孫降臨から説き起こして、歴史の流れのなかで文学活動と呼べるものに至るまでの展開を述べている。天孫が日向に降臨し、神武天皇が東征して橿原に建都する時代までは「人文未だ作ら<sup>おこ</sup>らず」とする。その後、神功皇后の征韓と応神天皇の時代に至り、百濟・高麗（<sup>高麗</sup>）の入朝によって漢字・典籍が伝わり、ついに人々は孔子の学問に向かうようになったことを述べる。その漢字による学問と思想を受けて、聖徳太子の時代になると礼・儀に沿って制度を定めるが、「未だ篇章に違<sup>あ</sup>らず」として、文学活動といえるところには至らなかつたとする。その後天智朝の文治政治の記述が続く。天智朝以前については、天皇とその時代の特筆すべき（文字にかかわる事象）とを絡めて列挙しているに過ぎないのだが、漢字の使用、文章表記、典籍の受容、いずれの段階においても、それが朝鮮半島との交流によってもたらされたものであつたことを序文の筆者は自覚している。

当然、その上に成り立つ文学活動の歴史においても、その活動の意義を朝鮮半島と唐を視野にいれて理解していと推測できる。また、序文では直接触れていないものの、『懐風藻』編纂にあたって、長屋王邸における「宴新羅客」詩を多く収載したことは、外交と文学活動の関係を意識していたことの現れであつたとみることができ。序文末尾に編纂の目的を次のようにいう。

余撰此文意者、為將不忘先哲遺風

（余が此の文を撰ぶ意は、將に先哲の遺風を忘れざらんが為なり）

古き理想の時代の先賢が遺した作品の散逸によって、そのことが忘れられないように纏めたと述べるが、編纂者が拘るその「先哲の遺風」とは、単なる（風雅）などではなく、（先人の遺した教え）にちかき意味（「風」は、おしえ・ならわし）であろう。既に触れたように、稿者には当時の漢詩制作の背後にみえる（文治主義を標榜した外交政策）としての詩宴を指すように思えるのである。結論めいたことを先に言えば、序文が天智天皇のことを詳細に説く

は、文治とくに文学活動を対外政策と関わらせた時代と見たからである。朝廷における文学活動は文治主義を対外的に示すことを意識して行われていたのであるが、その出発点を天智朝と捉えていたのである。

## 二、懐風藻序文が天智朝の文治主義と「詩宴」を描いた理由

七世紀後半から八世紀にかけての我国は、常に周辺国に気を配らねばならない状況に置かれていた。その発端となったのは白村江の敗戦である。<sup>(注2)</sup>朝鮮半島から兵を引き上げて畿内へ戻った天智天皇は、逆に唐や新羅から侵略されることを恐れて、北部九州の軍事拠点の防備を固め近江へ遷都した。その一方で、税収と兵力の把握のために戸籍制度を整えて国力増強を図った。さらに、海外との争いを避けるために新羅との外交を再開し、遣唐使を派遣し、文治を標榜することによって国内の安定を示そうとしたのである。その安定と平和を象徴するのが、序文のいう「宸翰文を垂れ、賢臣頌を献ず」の君臣唱和の詩宴だったのである。

この天智朝の姿勢が奈良時代半ばの人々の意識に残っていたが故に、『懐風藻』編纂者は、我が国における文学活動の出発点を天智朝に求めたのであろう。稿者は、この時代の詩宴を政治の安定と文化水準の高さを「蕃客」に示すパフォーマンスと捉えている。懐風藻序文が全体の三分の一にも及ぶ文字数を割いて天智朝の文治政策の成果を強調するのは、ここに文学活動の意義と理想を見出しているからである。序文は天智即位後について次のように記す。

淡海先帝の命を受くるに至り及んで、帝業を恢開し、皇猷を弘闡す。道は乾坤に格<sup>いた</sup>り、功は宇宙に光<sup>て</sup>る。既にして以為ひけらく、風を調へ俗を化すには、文より尚きは莫く、徳を潤し身を光らすことは、孰<sup>いづ</sup>か学より先ならむと。爰に則ち庠序を建て、茂才を徴して、五礼を定め、百度を興す。憲章法則、規模弘遠、復古より以来、未だ有らざるなり。是に於いて三階平煥、四海殷昌、旒纒無為、巖廊暇多し。旋<sup>めぐ</sup>って、文学之士を招き、時に、置禮の遊を開く。此の際に当りて、宸翰文を垂れ、賢臣頌<sup>(注3)</sup>を献ず。

右の文章を要約すると、「天智天皇の時代に法制度を整え、学校を建て、民を教化した結果、世の中が良く治まって、官僚は何もすることが無かった。そこで、文人を集めて宴会を開いて漢詩を詠じた」ということである。序文は敢えて白村江の敗戦については触れない。しかし、風を調へ俗を化すには「文」、徳を潤し身を光らすには「学」と考えて学校を建てて人材を集め育成して、制度を整えたのは白村江の敗戦後の対策である。結果的にはそれによって国政が安定し平和が訪れて文治主義を標榜するに相応しい治世となったと序文の筆者は見ているのである。

このような思想が表立って広められたのは、壬申の乱から時を経た文武天皇から元明天皇の時代にかけてであったと思われる。大海皇子（のちの天武）と天智天皇が対立することになったとはいえ、天智は持統・元明兩女帝の父であり、文武天皇には祖父にあたるからである。本格的に神話が整備されはじめた八世紀初頭には、朝鮮半島との交流が盛んになるが、歴史的記述は「朝貢」の語を意図的に用いる。これと平行して、朝鮮半島で勝利した神功皇后伝説がクローズアップされ、逆に、斉明・天智が半島政策に失敗したという記憶は薄められて、文治主義の印象が浸透していったのであろう。

天智天皇の治世から八十年を経た天平勝宝三年（七五一）に書かれた懐風藻序文の記述が文飾なのか、何か基づく文献があつたのかとなかなか不明である。また、「旋招文学之士、時開置醴之遊」の「時」が（しばしば）の意なのか（ある時に）なのかという解釈上の問題があることは措くとしても、文学活動が行われたという事実はあつたのだろう。但し、天智朝の作品で『懐風藻』に残るのは大友皇子の二首だけである。壬申の乱によって灰燼に帰したというが、それでもその活動は記しておく必要があつたということなのだろう。

天智朝の記述のあとは大津皇子、神納言、文武天皇、藤原不比等のことが彼等の作品中の語を絡めて列挙される。つまり、「文学之士」を招いて宴を開いた天智朝の思想は、「天智天皇に愛され」（書紀）、「幼年にして学を好んだ」（懐風藻の伝）とされる大津皇子に受け継がれて、次の文武天皇時代の『律令』の完成と侍宴応詔詩制作の「場」につながつたと見ているのであろう。懐風藻序文の筆者の意識としては不比等あたりまでが文学史上の区切りであり、それ以降が近代という認識なのであろうか。ともあれ、過去の文学活動の思想を受け継いで、長屋王時代に新羅使

節を饗応する詩宴が開かれるに至ったのである。長屋王詩宴の詩を多く収載しながら、序文がこれについて全く触れていないのは、時間的にそれほど隔たっておらず、未だ「滅びる」とは感じられなかったのだろうか。長屋王邸の新羅使宴については後で詳しく述べるが、これが対外的なことを意識しての文学活動であったことは紛れもない。冒頭でも触れたが、序文は朝鮮半島との交流が典籍や孔子の学問をもたらしたことを述べている。また、天智時代の朝廷における漢詩の詠作が、文治主義の成果が生んだ国内政治の安定によるものであることを強調する。序文の筆者は外交と文学活動の関係を認識しており、唐・新羅連合軍に白村江で敗れたことが、わが国に文治主義の必要性を悟らせ、外交の席上における文学活動の有効性を知らしめるに至ったと考えていたのかもしれない。

なお、無用な争いを避けるべく外交に心を砕いたのは、戦乱と唐の圧力に翻弄され続けた朝鮮半島においても同様であったろう。新羅は、白村江では唐と組んで日本軍と戦ったが、唐との関係は微妙であった。唐は屢々新羅や高句麗に出兵して圧力をかけていたからである。百済もそれゆえ滅亡した。新羅とて百済と同じ運命を辿る可能性もあったため、背後を守り且つ亡命先を確保する意味で、日本との無用な争いを避けておく必要を感じていたのだろう。しかし、目的は何であれ、彼等は国使としてやってくるため、わが国としては相応の対応が必要となる。その外交の「場」に重要な役割を果たしたのが漢詩文だった。文化水準の高さをさりげなく示し、かつ意思の疎通・価値観の共有を確認するには有効な手段だったのである。

### 三、文武朝以降の朝儀と新羅使

文武朝になると新羅使を元旦の朝儀に参列させることによって、わが国の威儀を示そうとした。そのことが侍宴応詔詩の語句にもあらわれているのである。七・八世紀の詩歌を考える際には、まず、それらが〈集団の場〉で詠まれたものであることを前提にしなければならないことが多い。特に漢詩の場合はその特徴が顕著である。<sup>(注4)</sup>〈集団の場〉の作には、同席者全員が詩を賦す場合と、代表者が皆の意見を代弁して詩を献上する場合がある。それらはそ

の場で「披露」され、記録されて（後代に残される）ことを前提として作られている。朝廷における侍宴詩応詔詩がそれである。

ところで、長屋王邸で新羅使節団を接待した際の作品群はその目的が詩題によって明確にされているわけだが、『懷風藻』には日本人の作品しか載せられていないのである。このことは重要である。新羅使宴ですら、主役の新羅使・副使の作品は収載されていない。すると、それ以外の詩宴等に新羅使が招待されて同席していたとしても、その痕跡は残されないことになる。既に天智朝においてもそのような機会があった可能性は十分考えられるし、それは天智朝に限った事ではないだろう。むしろ、後になるほど機会は増えていくはずである。このことを文武朝以降の元旦朝儀の記述と侍宴詔詩の語句から探ってみよう。

海外の賓客が都で開かれた詩宴に招かれても、その痕跡が残らないと考えたときに、外交の窓口である大宰府においても同様なことは有り得る。後でも述べるが、新羅使節団が大宰府に滞在する期間は決して短いわけではない。しかし、防衛上の問題があるため、地形を詳細に調べられては困るので自由に外出させることはできない。したがって、無聊を慰める手段は限られている。その点においても文学活動は重要となる。ならば、大宰の帥である大伴旅人の漢文体作品の制作も海外からの賓客に披露する機会を意識しなかつたはずはないだろう。なお、旅人は都にいる吉田<sup>（吉田）</sup>宜に漢文体の作品を手紙に書いて送っている。学識高く漢詩文に造詣の深い彼に批評を乞うためである。

白村江の後、しばらくして新羅との国交は再開されるが、天智朝の新羅への対応がどのようなものであったか、『日本書紀』に詳しい記述は存在しないが、いくつかの事例を組み合わせて参照すれば、見当が付く部分もあるだろう。懷風藻序文が記す理想的な天智朝の文学活動は、新羅から来た使節団に見せてこそ意味があっただろう。なお、『日本書紀』の記述は、新羅からの「進調」「朝貢」としているが、事実は少し異なるのであろう。

使節団を迎える儀礼の様式や段取りは時代と共に整えられていくことは考慮せねばならないが、たとえば、文武天皇の慶雲二年（七〇五）の『続日本紀』の記述を例に取ると、おおよそのイメージが掴めるだろう。この時代には、大宝元年（七〇一）と同三年にも新羅使来訪の記述があるが、慶雲二年（七〇五）の記述が最も詳細である。

『大宝律令』の完成とともに外交に関する制度も整えられたことは想像に難くない。『続日本紀』の慶雲二年から翌三年にかけての記述から新羅使に関する部分を拾い出したのが左記である。

○十月丙子（三十日） 新羅貢調使来献。

○十一月己丑（十三日） 徵発諸国騎兵、為迎新羅使也。

以正伍位上紀朝臣古麻呂、為騎兵大將軍。

○十二月癸酉（二十七日） 新羅使等入京。

○正月丙子朔（一日） 天皇御大極殿、受朝。新羅使等在列。

朝廷儀衛、有異於常。

○一月己卯（四日） 新羅使貢調。

○一月壬午（七日） 饗新羅使等于朝堂、奏諸方樂于庭。叙位賜祿各有差。

○一月丁亥（十二日） 新羅使等還蕃。賜其王勅書曰：（内容省略）

内容を確認しておこう。十月三十日の「新羅の貢調使来る」は、大宰府からの急ぎの知らせが到着したことを記したものである。知らせが都に届いたのが十月三十日であるなら、博多湾内に新羅使船が到着したのは、十月半ば頃であると推測できる。大宰府からの報告を受けて、新羅使を迎えるための騎兵隊を組織すべく畿内の諸国から騎兵を徵発し、十一月十三日に紀朝臣古麻呂をその騎兵大將軍に任じたということであろう。その四十四日後の十二月二十七日に新羅使一行は都に入っている。献上品等の荷物を運びつつ大宰府から都へ上る際の所用日数として、公式令の規程の「三十日」を目安にして逆算すれば、十一月下旬頃大宰府を出発したことになる。それまでの一ヶ月半近く筑紫館に滞在していたと推測される。難波での日程調整があったとしても、大宰府滞在は一ヶ月は下らないだろう。おそらく、騎兵隊の準備等の目途がつき、また、元日の朝儀に参列させることも視野に入れて、大宰府へ一行上京の日程を指示したのであろう。

この年の十二月は二十九日までなので、入京の三日目が、大極殿で行われる元日の朝儀である。博多入港後、最短で済ませれば、十一月中旬に「貢調」のことは終了してしまふ。元日の朝儀に参列させるために、意図的に滞在日程を引き延ばしたと推測できる。「朝廷の儀衛、常に異なること有り」という点には特に注意しておきたい。

一月四日 新羅使貢調。

一月七日 新羅使等を朝堂に饗宴し、諸方の楽を庭に奏でしむ。

一月十二日 新羅使の帰国に際して、新羅王に勅書を賜う。

新羅使一行の都における日程は「朝貢」、「饗宴」、「賜勅書」の三段階に分けられるが、それほど日をおかずに行われている。饗宴時の諸方の楽とは唐楽、高麗楽（朝鮮半島諸国の音楽の総称）をいう。外国の音楽も演奏させて文化水準の高さを示したのである。その五日後、勅書を賜って帰国の途につく。都における滞在は半月程である。一月中旬に都を出発したとしても博多に到着してから、休息と船出の準備にも日数を要する。船出をするのは、三月頃である。

さて、文武朝の例に倣って行われたのが、和銅七年（七一四）の新羅使節団への対応である。

○十一月乙未（十一日） 新羅国朝貢。差発畿内七道騎兵合九百九十、為擬入朝儀衛也。

○十一月己亥（十五日） 遣使迎新羅使於筑紫。

○十二月己卯（二十六日） 新羅使入京。率騎兵一百七十、迎於三橋。

○正月甲申 朔 天皇御大極殿受朝、皇太子始加礼服拜朝。

○一月己亥（十六日） 宴百寮主典以上并新羅使。

○一月庚子（十七日） 賜大射于南闕、新羅使亦在射列。

○三月甲辰（二十三日） 還蕃、勅大宰府賜綿五千四百五十斤、船一艘。

この年には諸国から集めた騎兵の人数が具体的に記されている。元旦の朝儀に新羅使節も参列することになるため、



人数を増やしたからである。慶雲二年の「朝廷儀衛、有異於常」の措置に就つたためである。但し、この和銅七年の騎兵の人数が慶雲の例に準じたものなのか、(皇太子が初めて朝儀に姿を出す)ため、特に厳かにしたのかは定かではない。

右の例によつて、新羅使一行が往路においても復路においても、大宰府(筑紫館)に滞在する期間が長いことは確認できた。大伴旅人が大宰府において漢文体の作品を作り、敢えて依拠した作品を想定できるよう工夫した(「遊松浦河序」——「遊仙窟」、「梅花歌三十二首序」——「蘭亭集序」など)理由もここに求められるだろう。憶良についても同様であろう。この新羅使が滞在する一ヶ月前後の期間の積み重ねが筑紫の文学活動(あえて筑紫歌壇とは言わない)のありように影響を及ぼしたともいえるだろう。

#### 四、不比等の「元日応詔」詩と大伴旅人の「初春侍宴」詩

長屋王邸で新羅使接待のための詩宴が開かれるようになる以前から新羅使等は朝儀に参列していた。そのことを意識した表現として、〈元日の朝儀〉の際の藤原不比等の詩を挙げておきたい。

##### 元日応詔

正朝観万国	元日臨兆民	正朝に万国を観、元日に兆民に臨む
齐政敷玄造	撫機御紫宸	政を齊へて玄造を敷き、機を撫して紫宸に御す
年華已非故	淑氣亦惟新	年華已にして故には非ず、淑氣も亦た惟れ新なり
新雲秀五彩	麗景耀三春	新雲は五彩に秀で、麗景は三春に耀く
济济周行士	穆穆我朝人	济济たり周行の士、穆穆たり我朝の人
感徳遊天沢	飲和惟聖塵	徳に感じて天沢に遊び、和を飲んで聖塵を惟う

右の詩は、元日の朝儀の様子を詠うもので、詩題にある如く天皇の詔を受けての作であるが、『懷風藻』中に同時期と思われる同題の詩は収められていないことから、臣下を代表するかたちで献じたものとも考えられる。文武朝であれば、石上麻呂が不比等よりも上席であったが、彼は詩を一首も残していない。これに対して、藤原不比等は『懷風藻』に五首もの詩が採られるほどの詩才をもつ。また、『律令』撰定の功臣であり、皇位継承者と目される首皇子（のちの聖武）の外祖父としての立場から、臣下の代表として詩を賦して献上することもあったのであろう。臣下を代表するかたちで元日の祝意と朝儀の莊嚴さを讚美する詩であれば、当然その場で読み上げるなどして披露されたはずである。

さて、不比等の元日応詔詩で問題とすべきは、第一句に「万国」としていることである。同じ仄字の組み合わせでも、国内の諸地域を指す場合には「海内」「国域」もしくは「国内」（くぬち）とするだろう。対となる第二句の「兆民」は〈多くの民〉の意と同時に〈域内の民〉の意をもつ。したがって、「万国」は海外（半島）の諸国を示しているとみてよい。ここでは『律令』にいう「蕃」を意識しての表現であろう。また、第九句・十句の「周行土」「我朝人」の対句についても、前者が後者の言い換えというよりも、初句とのかかわりからみても並列であり、海外の賓客を指すと考えたい。

此の詩が作られた時期を確認しておく、文武天皇即位（六九七年八月）以降、不比等が没した養老四年（七二〇）の間である。この間に『続日本紀』において「元日受朝」の記述があつて元日朝儀が行われたと確認できるのはその半数ほどである。更にその半数において、其処に新羅などの外国の使節が参列している可能性（その時期に新羅使が都にいたことが確認できる）が考えられる。なお、長屋王に「元日宴応詔」と題する詩はあるが、「宴」とあるため、元日の朝儀そのものではなく、終了後の宴と考えられる。また、長屋王が成人して位を授かった（無位から正四位上に）のは慶雲元年（七〇四）であることから、年齢的にみても後の聖武朝ものと考えた方がよさそうである。内容も雰囲気も不比等のものとは異なる。長屋王詩には外国人の存在を意味する語句は見られず、庭の風景や楽曲のことを詠み込んでおり、のびやかに寛いだ印象である。

さらにもう一首、不比等の「元日応詔」詩と同様に外国の賓客を意識しているのではないかと思われるものとして、大伴旅人の侍宴詩を挙げておきたい。

初春侍宴 大伴旅人

寛政情既遠 迪古道惟新 寛政の情は既に遠く 迪古の道は惟新<sup>た</sup>し

穆穆四門客 濟濟三徳人 穆穆たる四門の客 濟濟たる三徳の人

梅雪乱残岸 煙霞接早春 梅雪は残岸に乱れ 煙霞は早春に接す

共遊聖主沢 同賀撃壤仁 共に遊ぶ聖主の沢 同に賀す撃壤の仁

詩題に「初春侍宴」とあるから、元旦以外の日（節会であれば七日か十六日）に宴を賜った際に詠まれたものであろうが、制作年は不明である。大伴旅人は天平二年十二月に大宰府を発つて都へ戻った翌年には没しているので、当該詩は神龜年間に大宰府へ赴任する以前の作と見て良いだろう。元明・元正両女帝の時代には応詔詩や侍宴詩は殆ど作られなかったというのが、稿者の従来からの主張である。したがって、大伴旅人の当該詩も藤原不比等の詩と同様に文武天皇の慶雲年間までに作られたとみておきたい。聖武天皇の即位前後の可能性もある。

さて、この詩で注目しておかねばならないのは、第三句に「穆穆四門客」とあることである。「客」とは、本来居るべき所にいない者を指す語である。旅行く人や遠方へ赴任している人物をいう。したがって、朝儀に際して整列する自国の官僚たちを「客」と表現することはない。此の語は当然、新羅使節団や亡命してきた百濟人をさすのである。さらに第七句に「共」、第八句に「同」の文字があることも注意しておきたい。

## 五、長屋王邸における詩宴と新羅客の接待

冒頭でものべたように文学活動は国の安定と繁栄を示す外交政策の一環でもある。そのことの最もわかりやすい

例が、長屋王邸で行われた「宴新羅客」詩である。新羅使節団が帰国する為に平城京を離れる際に、彼等を送別する宴を長屋王邸で開いたことが『懐風藻』詩によってわかる。送別といっても、彼等が都に長く滞在したわけではない。先に引用した慶雲年間の例では、十二月二十七日に入京し、元日の朝儀を挟んで一月十二日に帰国にあたって勅書を賜っている。遣唐使・遣新羅使は通常、「辞見」から一兩日中に出発する。このことからみても、新羅使節一行の都滞在は半月程度であったとみられる。吉田宜の79詩のように接待の宴であっても「別れ」を意識した表現「未だ新知趣、還作飛乖愁」（未だ新知の趣を尽くさざるに、還りて作す飛乖の愁）となる。日程によっては歓迎の宴が送別も兼ねるようなこともあったろう。

本来は、朝堂院など大内裏の区域内のどこかで行われていたのであるが、隠者の住まいを思わせる造りをもつ長屋王邸が佐保に完成し、そこを会場とする詩宴がしばしば開かれたものとみられる。『万葉集』巻八には元正上皇と聖武天皇が行幸時に詠んだ歌がある。

はだすすき 尾花逆葺き 黒木もち 造れる室は 萬代までに（巻八・一六三七）

青丹よし 奈良の山なる 黒木もち 造れる室は 坐せど飽かぬかも（〃・一六三八）

この歌の左注には「右、聞之御」在左大臣長屋王佐保宅「肆宴御製」とある。また、『懐風藻』にも長屋王邸を隠者の居として表現したものととして藤原宇合の「秋日於左僕射長王宅宴」詩がある。唐の皇族の別荘に似せたとおぼしき長屋王邸で新羅使節団を接待することが慣例化しつつあったのだろう。

さて、長屋王邸で新羅使節を饗宴するような機会に詠作された作品であることが詩題によって明確にされているものは『懐風藻』中に十首残されている。これを単純に詩題によって作品を分けると三つに分けられる。数字は岩波古典文学大系による作品番号である。

A 「初秋於長王宅宴新羅客」…62

B 「秋日於長王宅宴新羅客」：52、60、63、65、71、77、79、86  
C 「於宝宅宴新羅客」：68

Aは「初秋」とあるため、「秋日」とは別の機会に作られたものとみてよい。なぜならば「秋日」とあるBグループ八首のうち、52番詩を除く七首は全て〈探韻〉によるもので、各自が探り得た文字が注記されているからである。探韻の文字が記されていない52番詩については、その部分の注記が脱落した可能性も考えられなくはないのだが、詩題の「初秋」と「秋日」の違いは脱字や誤写とは考えられない。

Bグループの八首も全てが同一機会に賦されたものか否か検討の余地がある。□で囲んだ52番詩（山田三方）と65番詩（下毛野虫麻呂）の二首には序文が付されているからである。その場に在席できなかった人・後世の人のために序文を付して詠作時の経緯を述べるのが基本的な在り方で、八世紀初頭に伝来してわが国に影響を及ぼした王羲之の「蘭亭集序」にも「後之覽者、亦将有感於斯文」（後の覽む者も將に斯の文に感ずること有らむ）とある。集団の場で詩を賦す際の序文は、個別の作品に付けるものではなく、全体の冒頭に置くものである。人々が集って詩を賦す際には、必ず「序文」を付して、その会が開かれた経緯を記す。また、当日の気候、集まりの賑やかさ、風景等を四六駢儷体で綴るのであるが、そこで詠まれた詩全てがその序文の下に置かれるのである。つまり、一度の詩会に序文は一つである。序文の担当者は参加者中の年長者もしくは最も文章表現力の優れた者があたり、皆の意見を代弁するかたちで書く。したがって、探韻であるか否かを問わずとも、序文を持つ52番詩と65番詩の二首は別の機会につくられたものと考えなくてはならない。これについては既に井実充史が序文が二つある以上、二度行われたのだと指摘している。<sup>注5</sup>しかも、52番詩には探韻の注記がないのであるから、別の機会の作と捉えざるを得ない。つまり、Bの「秋日」の題をもつ作品群には二度以上の作品が混在していると考えるべきである。

なお、Cは長屋王自身が詠作したもので、会場とされた彼の邸宅が佐保にあり、漢風の好字で「作宝」と表記したことによる。「宝宅」「作宝楼」の語が懐風藻詩に散見される。Cの68番詩には探韻の記載があるので、Bのグ

ループの何首かと同一機会に詠まれたものである可能性もある。但し、この長屋王詩には「菊浦落霞鮮」の句があり、晩秋の重陽前後の作とみられる。この日のために特別に菊を植え込んだか大瓶に活けて庭に置いたものであろうか。無論、「晩秋」は「秋日」に含まれるのだが、題に「秋日」をもつBグループでは、8首のうち71番詩に「菊酒」の語が有るだけで、他の七作品には全く「菊」もそれを連想させる語句も詠まれていないのである。

また、前掲ABCには含まれない備前守田中朝臣浄足の66「晩秋於長宅宴」詩は、詩題に「新羅客」はみえないものの、詩中に「巖前菊氣芳、君侯愛客日」（巖前に菊氣芳し、君侯客を愛す日）の表現がある。「客」は海外の賓客をさす語である。敢えて他の作品が表現しない「菊」を詠むのは当該詩が九月九日の重陽前後である可能性を考えて良いだろう。（九月九日は天武天皇の忌日であるため、当日は公的な場では宴を開くことはない）また、Bで唯一「菊」を詠む71番詩の「客」の字も気になるところである。これらのことから考えると、田中朝臣浄足の66がCの長屋王詩と同じ機会のものである可能性も完全には否定できない。Cの長屋王詩が晩秋（九月）の作ならば、71番を除くBグループとは別の機会に作られたものとなる。このように見てくると、長屋王邸で開かれた新羅使宴が複数回に及んだことは間違いない。

稿者は、かつて懐風藻中の応詔詩の多くが同一の文字を押韻文字として使用することについて論じたことがある。<sup>(注9)</sup> その際には、〈天皇を讚美する「場」の統一感〉もしくは〈参加者の一体感〉を求めてのことである考えた。現存する初唐の用例を幾つか挙げて、遣唐使や留学生が見聞してきたことを参考にしたと述べた。初唐の「安樂公主移入新宅侍宴応制同用開字」で「開」字を使用して詩を詠んだ例を挙げておきながら、なぜ、初唐の手法を参考にしたのかについては、注意が及ばなかった。わが国でそれに倣う理由は〈海外を意識したが故に、最新の手法を試みた〉以外にはありえない。「場」の一体感もさることながら、海外に向かつて（特に新羅に対して）わが国の文化水準の高さを誇示したかったためであろう。先に確認した藤原不比等の「元日応詔」詩や大伴旅人の「初春侍宴」詩に海外の賓客の存在が読み取れるならば、他の侍宴応詔詩の中にも、実際に新羅からの使節団もその席にいたが故に最新的手法を用いたと考えれば納得がいく。その意味では、〈探韻〉も同じである。対等な立場で交流するためには、

相手国と同等或いはそれ以上の水準にあることを示す必要があると考えたのだろう。それが明確にあらわれているのが長屋王邸の詩宴である。〈探韻〉では予め詩を作っておくことが出来ないため、その場で押韻文字を決められたとしても対応出来るだけの高水準（漢詩を自在に扱える）であることのアピールである。

ともかく、懐風藻全体の作品数が百二十首であることからすると、新羅使接待（送別）宴の作が十首にも及ぶことには注意を払っておく必要がある。既に確認したように、長屋王邸で開かれた回数が多かったことも理由であろうが、懐風藻編纂者が文学活動を〈外交の一環〉と捉えていたことが大きかったと想像されるからである。

なお、詩宴の主目的が新羅使接待であれば、そのことが詩題によって明らかとなるが、別の目的で開催された宴に新羅使が招待されていた場合には、詩題に「新羅客」の語はあらわれない。たとえば、「七夕」や「釈奠」などである。七夕の詩を賦す機会はそう多くは無かったのである。その七夕詩会の開催の必然性を、海外の使節団の接待と絡めて想定することも、あながち無理とはいえないのではないか。

## 六、海外を意識した文学活動と淡海三船の『唐大和上東征伝』

新元号「令和」の典拠となった「梅花歌三十二首并序」について些か触れておきたい。大伴旅人が此の序文を書いた理由も賓客との交流を意識していたためとみておきたい。むろん、和歌とは切り離して示すのである。「初春令月、気淑風和」には、〈穏やかな季節〉だけではなく、旅人が感じていた此の時代の〈空気〉も読み取らねばならない。この時期は諸外国との関係も安定していたし、旅人にとって重要課題であった隼人対策にも問題がなかったのである。

既に見たとおり、大宰府からの報告が都に届いてから迎えの使者を筑紫に遣わしているため、新羅使節団はおよそ一ヶ月を筑紫館で過ごしたことになる。帰国時にも出航の準備や天候の状況で日数がかかるため、往路、復路ともに、使節団はかなりの日数を筑紫館に滞在して過ごすことになる。この間の無聊を慰めるのも帥や大弐の役割で

ある。大宰府の客殿に招くこともあつたらうし、大宰の帥が挨拶に出向くことはあつたらう。大宰府と筑紫館を結ぶ大路はそのためのものである。「職員令」の大宰帥の職掌の中には「蕃客や饗宴」のこともみえる。筑紫においても、縮小されたかたちの挨拶や慰勞の饗宴の事などが行われたのである。彼等賓客を接待するに際しては、詩の応酬や文学談義も必要であろう。なお、筑紫館に滞在するのは新羅ばかりではない。我国が遣唐使を派遣すれば、その帰国と共に答札の使節団が送られるのである。つまり、彼等の見聞がそのまま、わが国の評価へとつながるので疎かにはできない。むしろ、多少の背伸びをしてみせる必要さえあつたらう。懷風藻序文が天智朝の国内政治の安定の結果として強調する盛んな詩宴は、国外の視線を意識しての行為に他ならない。こちらの思惑はともかく、唐および唐から冊封を受けていた朝鮮半島の国々からも、わが国は文化の中心から最も隔たつた辺境であつて（格下）の国と認識されていた筈である。それ故の苦心があつたのである。

当時の東アジアは、唐を中心とした漢字文化圏で、外交の為の共通語は漢語。意思の疎通は漢語漢文（古い時代の中国語）で行われていた。しかも一時期は毎年のように使節団が往来していたのである。したがって、我が国の官僚等の視線は常に外国（と言っても漢字文化圏限定）にも向けられており、直接関わらない部署の官僚もそのことは意識せざるを得なかつた。東アジアの共通言語であつた漢語は「大学寮」（朝廷の官吏養成機関）でネイティブの音博士が教えていた。外交に携わる官吏には漢語運用能力とその基盤となる漢文学の教養も必須であつた。これは遣唐使や遣新羅使として渡航するものに限つたことではない。直接の雑務を担当する女蕃寮の官僚だけでなく、ある程度の身分地位にある者ならば饗応の場にかかわらねばならない。既に述べたように、かなりの頻度で外交使節団は訪れており、慶雲年間のように大規模でなくとも、必ず饗宴の場は設けられたはずである。その際に漢詩を賦すこともあつたらうし、挨拶の詩を贈る事もあつたらう。現在、そのことが明かな作品として残っているのは、長屋王邸における「新羅使宴」十首であるが、これらが全てが同一機会に詠まれたものではない。長屋王邸における新羅使接待の詩宴が複数回おこなわれていたことが内容から読み取れるのは既にみたとおりである。官僚貴族の文学活動の中心は漢詩制作にあつたことは言うまでもないのだが、これを海外使節団との交流に役立てていたこと



に改めて注意を払っておきたいのである。

ところで、大宰府へ下向してからの大伴旅人は、大宰府の統括者として海外使節団との交流を主催する立場にある。また、任が果てて都に戻ってからも文化交流の場に加わるべき地位に在った。それゆえ、この梅花の序文はこの日の参加者に提示するだけで終わるものではなく、都の知識人や海外使節団にも機会があれば披露するつもりで書いたものと推測される。大伴旅人は文武天皇が即位して以降、都において何度か海外の賓客と宴で同席する経験をしているはずである。そのことが大宰府下向後、意識的に漢文体の作品を作ることへと駆り立てたのかもしれない。それ故、〈梅花の宴〉の序文を新羅からの使者等にも見せることを意識して書いたと稿者は考えるのである。実際に彼は先ず、都にいる吉田宜宛ての手紙に、これらの作品を書いて送っているのである。この歳の十二月に都へ戻り大納言となるが、翌年七月に病没している。梅花の宴以降、天平四年の一月まで新羅使の来朝はなかったので、旅人の目論見は叶わなかったのである。

付言すれば、大伴旅人が梅花歌の序文の発想のヒントとしたものとして「帰田賦」と「蘭亭集序」が挙げられているが、両者の大きく異なる点は、前者は「個人的な叙述」、後者は「集団の代弁」（認識を共有していることの確認）である点にある。したがって、旅人が意識したのは「蘭亭集序」のほうである。意識したのが蘭亭集序でなければならぬ理由がもう一つある。この作品は唐の太宗がこよなく愛して模刻を作らせ、王羲之の自筆本は副葬品のなかに入れたとも伝えられている。唐の知識人なら誰でも知っている作品であり、常に唐に目を向けている新羅にとっても同様の意味を持つ作品だからである。〈教養の共有〉を味わうために敢えて「蘭亭集序」とわかるように工夫を凝らしたといえる。

最後に、海外を意識して書かれたものとして『唐大和上東征伝』を挙げておきたい。この作者は、『懐風藻』編纂者の有力候補のひとつ淡海三船である。宝龜十年（七七九）に成った同書は、鑑真の七十六年の生涯に互つての伝記を書こうとしたのではない。鑑真が日本へ渡ることを決意してから、五度の挫折を経て、六度目によくや平城京に至るまでの十二年間の出来事に、その紙幅の八割をさいていることから、揚州を去った後の鑑真の足跡を知

らない人々に向けて書かれていることは明かである。〈東征〉は唐土に視点を置いた見方——つまり、読者を唐土に想定した謂である。同書には聖徳太子が中国の高僧南岳思禪の生まれ変わりであること、長屋王が「山川異域、風月同天」の句を刺繍した千枚の袈裟を唐に贈ったことなどのエピソードが著されているのも興味深い。三船が急いで『東征伝』を書き上げた理由は帰国する遣唐使を唐から送ってきた答礼の使者に託すためであったと考えられる。<sup>(注1)</sup>『懐風藻』の編纂者が淡海三船なのだとすれば、序文および所載する作品に海外に向けた視線が見て取れることも頷けるのである。

### 【注】

(注1) 高麗(高麗)は高句麗の別称。新羅以外の地域(おもに半島北部)の総称として用いることもあったようである。九一八年建国の王氏の高麗ではない。

(注2) 六六一年八月から九月にかけて、百濟救援のために朝鮮半島へ兵を送り、六六三年の八月に南西部の白村江で唐・新羅の連合軍に大敗する。帰国後は、逆に唐や新羅から侵略を恐れて、九州地域の行政機能と北部九州の軍事拠点を内陸部移して大宰府とし、水城を築いた。さらに万が一の際に援軍が来るまで立て籠もる大野城等を整備し、食料や武器倉も備えた。対馬など主要な島々には烽火台を置き防人を配した。やがて、唐、高句麗(のちの渤海国)、新羅との国交は再開される。とくに新羅とは、直接争った経緯があるにもかかわらず、天平四年に「三年に一度」と決めるまで毎年のように双方から使節団が派遣された。

(注3) 当該箇所原文は以下の通りである。  
及至淡海先帝之受命也。恢開帝業。弘闡皇猷、道格乾坤、功光宇宙、既而以為、調風化俗、莫尚於文、潤得光身、孰先於学、爰則建庠序、徵茂才、定五礼、興百度、憲章法則、規模弘遠、亶古以來、未之有也。於是三階平煥、四海殷昌、旒纒無為、巖廊多暇。旋招文学之士、時開置體之遊、当此之際、宸翰垂文、賢臣獻頌、雕章麗筆、非唯百篇。

(注4) 懐風藻詩には宴集の場で作られたものが多く、詩題によってそれが明かなもののみならず、独詠を思わせるような題であつて

も、宴に関わる表現が見られ、集団の場でつくられものは懐風藻全体の八割にも及ぶ。一例——中臣大島「三齋」詩に宴飲遊三齋、春日老「述懷」詩に臨水開良宴など。

(注5) 吉田宜。任那から来て帰化した人の子孫。はじめは僧であったが、優秀であったため文武天皇時代に還俗を命じられて医術の師範として仕えた。『懐風藻』に「秋日於長王宅宴新羅客」「從駕吉野宮」の二首がある。

(注6) 六世紀半ば「那津官家」、持統朝以降は「筑紫館」、平安時代には「鴻臚館」となる。おもに新羅・渤海の使節を迎える迎賓館的役割をもつ。

(注7) 岩波新日本古典文学大系『続日本紀二』補注には、延喜式を引用して、蕃客の拜朝があるときは、隊幡・小幡は常の倍の数をうけると説明している。

(注8) 井実充史「〈於長王宅宴新羅客〉詩の論」(『上代文学』73号 一九九四年十一月)。但し、井実は長屋王邸における「宴新羅使」詩宴を二度とみているが、稿者は三度と以上とみる。

(注9) 月野文子「懐風藻の押韻——韻の偏りの意味するもの——」(『上代文学と漢文学』(和漢比較文学叢書2 昭和61年9月)

(注10) 前掲(9) 論文ほか。

(注11) 月野文子「唐大和上東征伝」(『靈異記氏文縁起』古代文学講座11 平成七年六月)

